
blue spring

スカフィ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

blue spring

【Zコード】

Z5688A

【作者名】

スカフィ

【あらすじ】

主人公の『拓郎』が、あこがれの彼女『愛子』からラブレターを貰つた。放課後、拓郎は嬉しさのあまり待ち合わせの場所に向かう。だが、そこで待つていたのは…！？

俺の名は『森下 拓郎』とある高校に通う17歳。

俺は「れ」といつて頭がいいわけでもなく、運動神経がいいわけでもない、ましてや顔だつて良くなれば、ガタイだつていいわけではない。どこにでもいる普通の男だと思つ。

そして、じんな俺でもある女の子を好きになつてしまつた。
彼女の名前は『浅田 愛子』といつて俺と同じクラスの女子である。

「ヤベー、遅刻だつ」

俺は急ぎ足で教室に向かつた。
俺の担任は時間に厳しいので一分の遅刻も許さない。
遠くに教室が見えた。

(どうやら間に合つそうだな…)

と、やつ思つた時、廊下の奥から誰かが走つて来る気配を感じた。
振り向くと奥から女子生徒が走つていて、

「間に合つわよね?」

と、とつとつ俺に問い合わせた。

「あ、ああ…」

俺は少しスピードを落として答えると、

「ほりほりあ、急がないと遅刻しちゃつづー！」

と言いながら、彼女は俺を追い抜いた。

…そう！彼女こそが俺の憧れの天使！『愛子』ちゃんなのだつ…！

かすかに匂う愛子ちゃんの髪の香りが俺を幸せにする…。

その幸せにひたりながら走つてもんだから俺は思わず自分の教室を通り越してしまつた…！

「ア・アレー？」

たちまち教室から笑い声が聞こえた。

「森下くん、何やつてんの！？」

愛子ちゃんが入口の前で笑いながら言つ。

「あははは…」

俺は、照れながらそそくさと教室に入った

今日はかなりハッピーだ。

あの愛子ちゃんと一緒に教室へ入れたのだから…昼休み中俺はメロメロだつた。

その時後ろから声がした。

「森下くんつ、あの…

振り返ると愛子ちゃんが立っていた。

「…あ、何？」

「…うん、あのね…」

彼女が近づいてくる。俺は固まっていた。心臓がドキドキして息が苦しい。

「……これ。」

彼女は封筒を差し出した。

「俺に…？」

「…うん…」

俺はその封筒を受け取った。

「…じゃ…」

そう言って彼女は廊下の奥へ走って行った。
俺はすぐに震えた指で封筒を開けた。

とだけ書かれていた。

“放課後、体育館の横で待つてます”

(「れひで、まさか…告白…？」)

…その時俺は愛子ちゃんと初めて話した口の事を思いだした…。

…あの日はひびき英語の宿題があつた事を忘れ、休み時間に必死に問題を聞いてた。

「宿題やるの忘れたの…？」

俺は相手の顔を見ず

「ああ…、今日当たられる可能性があるから。一応やんなきやと思つて…」

「……はい、コレ跡して」

一串のノートが田の前に差し出された。

「…え？ いいの…？」

「うん。困った時はお互い様だよ」

と、彼女はニシ「コリ」と笑つた。

その時、俺は初めて彼女の顔に気が付き、俺はその笑顔に一目惚れしてしまった。

（ああ、ホントに天使みたいな人だなあ…）

「ヤダア、さりげなくアピールしてない？愛子～」

奥で彼女の友達が冷やかしていた。

「違うわよ～」

と彼女は自分の席に戻つて行く…。

…そう…その日以来俺は彼女に夢中なのだ。
そして彼女も俺の事を…？

…まさか…でもあの日ノートを見せてくれた彼女の丸みを帯びた字
で、
この手紙は書かれている。

（…うそだろ…？）

そして放課後がやつて来て、俺の緊張はピークに達してた…。

放課後になり、俺はすぐに教室をあとにして急ぎ足で体育館に向か
つた。

（彼女がいる！彼女がそこで待っている！）

…けど、彼女はまだそこにはいなかつた。

（早く来すぎたかな？放課後とは書いてあっても時間の事書いてなかつたしな。）

…なんて細かい事を考えていたその時、俺の背後から物音が聞こえて来た。

…ジャリジャリ…

（これは…彼女の足音かな…？）

俺はゆっくりと後ろを向いた。

（ん…？）

「…」めん、拓郎君を呼んだのあたしなの…」

…そこにいたのはあの「愛子」ちゃんではなく、
彼女といつも一緒にいる友達の「吉田美代子」だった。

「…びっくりしたでしょ？手紙の主があたしだったなんて…」

「う、うん。まあ…その…」

びっくりしたどころか正直ショックだった。

俺は何よりも愛子ちゃんだと信じ込んでいたし、
彼女はお世辞でもカワイイとは言えない。

カラダはブクブク太つて髪の毛はショートの天パー。

顔は吹き出物だらけで眼鏡をかけてる。

彼女には失礼だが、学校で一番かわいくないんじゃないじゃないかと思った
くらいだ。

そして彼女は俺に言ったのだ…！

「ずっと好きでした。付き合つて下さい。」

俺は血の気がひいた。

あまりにも予想していない出来事で美代子から告白されると思つて
なかつたから…。

「…わかってる。

拓郎君があたしの事を何とも思つてないって…。

ねえ、正直に答えてね…太つてる人キレイ？」

「え…！？」

俺は思わず口をつまらせた。正直たしかに苦手だからだ。

「…じゃあ、あたしががんばってやせたり…

拓郎君、あたしと付き合つてくれる？」

「いや、あのや…」

俺はそんな事よりも自分には好きな人がいる事を彼女に伝えようと
した。

だが、彼女は

「お願いつーウソでもいいから『うん』って言ってー。
そうすれば、あたしやせられる様な気がするのー！お願いー

「いや、そういう訳なくて…」

「お願いつー拓郎君ー！」

彼女は真っ直ぐな瞳で俺を見ていた。

その瞳からは彼女の俺への気持ちが痛いほど伝わって来る様な気が
して俺は思わず…

「わかったよ…。」

「…ありがと。あたしもう行くね。わざわざ来てくれてありがと
う…」

そう言つて彼女は走つて行き、俺はその姿をじっと見つめていた。

01 (後書き)

よろしけつたら感想や質問など下され。
お待ちしております。

翌日、教室に入ろうとしたらいで、美代子がいた。すると彼女は俺から田をせり、いつむいたままいつひつめたのだ。

「昨日の事だけど、アレが答えなの？」

「え？ アレ？」

「うそ……」

と俺は言った。

すると彼女は黙つたまま自分の席に座つた。

そして美代子はその日学校には来なかつた。

…多分かなりショックだったんだね…

・ さらに翌日、俺の親友のけんじがイキナリ

「おマジ、美代子と付き合つたの？」

と言つてきた。

「はー？ 何で急にそんな事言つただよ…」

「…こや今、学校中の噂なんだよ…」

お前と美代子が付き合つてゐるって……！俺かなりびっくりしたんだけ
ど……」

「はー？」

「いや、朝からその話題がスゴイぜ……。

ホラ、美代子の見た目が見た目だけに……や。

お前の女の趣味もかなり疑われてるぜ……。ははは……」

そう言つてけんじは笑い、俺は……ワケがわからなくてボーゼンとしていた……。

一体、何故そんな噂が流れ出したのだろうか……？

教室に入るとみんなが俺を見ていた。

その日は愛子ちゃんはもちろん、美代子も学校に来ていたので、すこじい居心地が悪かつた……。

……だけど何故そういう噂が流れ出したんだろう……。

考えられる事は美代子が俺を呼び出したあの日を誰かが目撃したつてことだ。

別に隠れて告白された訳じやないから見られても不思議ではない。だからといって、それで付き合つてゐるなんて噂を流されちゃこつちはたまたもんじやない。

愛子ちゃんや美代子にも迷惑かけるし、

誤解なんてされたくない。

俺は一人イライラしていた。すると

「あの話、ホントなの～？」

「拓郎君、正直言つて悪趣味だよ～！」

一と、近くに座つてた女子どもが小声で俺に問い合わせた。

「ね、ね、ねー、美代子のビゴがいいのあ～？」

「さうやーあの子よりカワイイのなんてクサるほど学校にいるのア。あつーもしかして拓郎君つてアレ…！？」

「え？ 何よ。アレって……。」

「ほりあ、太つてる人が好きな人の事を言つじやんー、デブ専だっけ？」

「あ～あ、言つよねえ！ あははは…」

俺はこの一人の会話に呆れて何もいえなかつた。

昼休み、俺は親友のけんじと屋上にいた

「なんだあれ… デマだつたの？」

「当たり前だよ～！ だいたい何で俺が美代子なんかと付き合つんだよ～。」

「俺こは…あ、愛子ちゃんがいるんだもん…。」

「なにオマエ、愛子が好きなのか……？」

「……俺、たしか前に話したよな？愛子ちゃんが好きって…なんでお前はいつも人の話忘れるワケー…？普通だつたら美代子と俺が付き合つてゐつて聞くだけで嘘か本当かすぐにわかる話だろつ…お前何年俺とツルんでんだよ…」

「……えー？ そりだつけ…」めん、オレ頭ワルイから…。でもよー、愛子ちゃんつて美代子の為にオマエに手紙まで渡したんだろう？

それつてオマエに気がないつて事だよな？」

「……痛いトコつくな…。そつ。そつなんだよね～。はは…」

「じゃあ、このまま付き合つつか？ 美代子と…」

「……お前、それ笑えないジョークだよ」

「ははは…しかし何でそんな噂流れ出したんだらうなー」

「それは俺が聞きたいよ…愛子ちゃんには誤解されそうだし、美代子がそれを本気にしてたら悲しい…」

だが、俺はいつもたつてもいられなかつたので、愛子ちゃんを呼び、誤解だつて事を直つ事にした。

「あ・あのせ、噂の事なんだけど…」

「……………」

「美代子から聞いてると感づんだけど……」

「……聞いたよ。だから付き合つてるんでしょ？良かつたね

「……いや、もうじやなくつて……アレはマジなんだ……」

「…………？」

「誰かが流したんだ。単なる噂なんだ」

「…………ひどい。」

「…………？」

「だつてわたし、美代子の口から聞いたんだよ。」

「拓郎君と付き合つてゐつてーなんでそんな事言ひの？。」

「え……あ、いや」

「まわか……美代子をからかつてたんじやあ……サイテーー。」

「え？からか？？」

「むつ……森下君の事、信じられない……」

「そつ言つて彼女は走つて行つた。」

「なんていう事だつ！あの噂を広めたのは美代子だつたのだ！
俺はさすがにムカついて美代子を放課後体育館の横に呼び出し、美
代子に問い合わせた。

するととんでもない答えが彼女の口から飛び出したのだ！

「だつて付き合つてゐるじゃないあたし達……」

何を言つてゐるんだ？」のオンナ……？

02 (後書き)

ここから美代子が進化していきます（笑）

「だつてあたし達付き合つてゐるじゃない」

「付き合つてゐる? 何、勝手に決め付けてるんだよ。」

「拓郎君、この前言つたじゃない……ヤセたら付き合つてくれるって

「あれは美代子が嘘でもいいから言えつて言つたから、言つたんだよ。」

「じゃあ嘘だつたの! ? あたしを騙したんだ! ? あたしは真剣なのに

……

「はー? 意味わからん事言つなー! 大体そんなセリフはヤセてから言えよ。」

「ヤセたわよ。昨日がんばつてヤセたわ。あなたに好かれたい為に学校まで休んで好きだから……」

「……?」

「俺は意味が解らなかつた。」

美代子が言つてる事は単に俺をからかつてる様にしか見えない。でも、彼女の表情は本物に見える。

演技がうまいだけなのか?

もう、とにかく俺は笑つてしまつた……。

「あつせせせ。もうやめよう、ぱい、こんな事……。

お前も何ムキになつてんだよ。もう終わつ……やめだ……やめつ……」

「……。」

「とかくつーあんな噂はもう流れなこでくれよ。俺帰るから」

そつこつて俺は帰つた。

美代子はうつむいたまま小声でブツブツ言つてたが俺は気にしなかつた……。

（着信音）

「ん？ 携帯か？」

俺は携帯の画面を見た

非通知着信

（ん？）

とは思つたが俺は携帯に出た

“ ピッ ”

「はー、もしもーーー」

……。

「…？お～い、誰？」

……もしもし。
あたしだけど

「…み、美代子？」

ピンポーン

さつすがあ！よく
あたしの声つて
気づいたよね」

「一いつていうかさあ…何で俺の番号知つてんの？」

そりやあ好きな人
の番号くらい知つ
てるわよ」

「普通さあー本人の許可をもらつだろ？」

それよりあたし
さつき拓郎君が
何に怒つてたの
かわかったの…

「はあ…！？」

ただそれが

言いたかったの
じゃあね！

“ プツ！ツー、ツー、ツー… ”

「 … ばかじゃないの あいつは … 」

俺は一人携帯につぶやいていた…。

そして、辺りは真っ暗になつていつた…。

その翌日

「 みんな聞いてよーあの噂はデマだから…
俺は美代子とは付き合つてないからなー 」

俺は立ち上がりてみんなに聞こえるよいひで言った。
もつもつと聞え切れなかつたからだ。

「 ホントなの？ 美代子、森下君とは付き合つてないの？ 」

愛子ちゃんが美代子に聞いているのが聞こえた…。

「 ……うん。 」

「 うひょーとおー何であんな嘘つぐのよー 」

「 あなたさあ、自分でどんな姿かわかつてんのよー 」

嘘なんかつくると余計醜くなるだけじゃん！！」

一気にクラスの皆さんから美代子に文句が押し寄せた。
愛子ちゃんは必死に美代子をかばつてたが收まりが効かない状態だつた。

突然、美代子が泣きだした。

「美代子、外に行こう今は出よ！」

愛子ちゃんは美代子を引っ張り俺の方へやつて來た。

「森下君、みんなの前で言うなんて…。最低…」

今までに見たことのない顔で
俺を見てそう言った。

そして二人は教室を出していく…。

俺はショックで突つ立つたままだつた。

「…………。」

大体何で俺があんな事いわれなきやいけないんだ！？
悪いのは俺じゃない…俺だつて被害者なのに…。

あの天使のような笑顔を曇らせてしまつた自分に
嫌悪感が押し寄せ、俺はヤリ場のない怒りと戦つていた…。

03 (後書き)

どなんじん絡まつていいく糸。

…どこで切れるかな？

放課後の教室。

俺は愛子ちゃんに呼ばれ待っていた。

「『めんね。急に呼び止めたりして…』

俺は正直、嬉しかつたりもした。

「ああ、別に気にして、ビーセヒマだしさ…」

愛子ちゃんは何か考へてるのか、俺に背中を向けていた。

少しの沈黙の後、ようやく重く口を開いた。

「美代子の事なんだけど…」

「…あ・うと…」

（やぱりその事か…）

俺は予想通りだったので少し面白くなかった。

「…もう少しやじくしてあざけられないかなー?」

「一えー?」

俺がその言葉に反応すると、愛子ちゃんは俺を見つめ、

「何か、美代子に對してすゞしく冷たい感じがするの…
私の知つてゐる森下君とはイメージが違つ氣がして…」

「……そ・そつ…」

俺は愛子ちゃんの言葉にすゞシヨックを受けた…。

「彼女ね…ホントにいい子なんだ…。

ホントに森下君の事好きなのよ…

がんばつて森下君の為にダイコットして少しでもキレイなうつし
てるの…」

「…でもあいつ、俺と付き合つてゐるなんて嘘付くから…

俺はそれをはつきりさせただけだよ…」

「…うん、それは美代子が悪いよね。

でも、森下君、美代子がヤセたら付け合ひはあるんでしょ?」

「いや、あれは美代子が強引に…」

「…じゃあ、森下君も美代子に嘘ついたって事!…?
お互に様だよね?今回の事で…」

「……でもー」

「とこかくつー言い訳はいいから。

付き合つ氣ないなはつきりと美代子に嘘ついて
このままだと美代子が可哀相だから…」

「…………ああ

「用はそれだけだから……じゃあね。」

そのまま立ち去る愛子ちゃん。

小さくなつていぐ足音が更にむなしくなつていぐ。

（……なんだか俺、愛子ちゃんに嫌われてるよなー……）

俺はすぐブルーになつた。

その日の夜、部屋で落ち込んでたら携帯が鳴つた。

「もしもしーーー……

…………。

（こけねつーボツーとしてたから

画面見ないで電話に出でしまつた！美代子かも……）

ハア……ハア……

電話の奥から不気味な声が聞こえた。

「ひ……ひうう……

「も、もしもし！？」

あ…あたしだけど…

やはり美代子だった。

俺は電話をすぐ切ろうとした。

今、吐いた…

美代子からの言葉。
俺は問い合わせる。

「吐いてたって？」

…うう…

俺はあまりの気持悪さに
思わず怒鳴る。

「いい加減にしてくれないかな！？」

それはこっちのセ
リフよ！拓郎君ズル
いんだもん。
あたしがヤセても付き

会話してくれないし…

美代子も切れ氣味に言い返す。

「え？ ヤセた…？」

俺は「どにじが？」と言わんばかりに
声を裏返しながら聞き返した。

「今、ヤセたって言つた？」

そうよ…がんばつ
て1キロヤセたのに
さ…皆の前でん
な事言われるなんて
話が違つでしょ？

「ちよつ、ちよつと待てよ！
お前ヤセたらつて言つてたけど、
どれくらの事言つてたんだよ」

え…？ 1キロでもヤ
セた事には変わら
ないでしょ…？

「……こや、俺はてつもつと……」

うん。だから2キロヤセようと思つて。今吐いてたの

「こや、だから……普通はせと、もつとスリムな事を言つだら? 1、2キロじやそんなに変わらなこだら?」

……なこな...

むつとヤセなつて
聞つてゐるの?

少しづつ美代子の声が荒くなる。

「だからや……」

アンタ、あたしを
殺す氣?

「一はー?」

殺す気かつて言つ
てるんだよ！！

“ プツ
”

ドスのきいた声で電話を切る美代子。
俺は携帯を見つめながら呆然としていた。

彼女は何かおかしいのか？
それともダイエットのせいなのか？
俺の中での不安は更に拡大して行つた。

“ プツー プツー プツー ”

04 (後書き)

ホントにいたら嫌だな（笑）

「あいつ完璧にヤバいんじゃないか？」

ゆづべの電話の話をした後のけんじの最初の一言だった。
俺はゆづべと地面に座り頭を頷く。

「うん。急に態度が変わるトコなんて、マジびびったよ。」

「お前、もつとまつぱり言ひづかだよ。
美代子に…嫌いなら嫌いとや。」

“
ペペッ”

「何だ…？メールの音か？」

俺はビクシとしながらメールを開く。

“今日一緒に帰るつよ。美代子より”

と書いてあった…。

「うつやあ、重症だな。恐いや…。」

けんじが苦笑しながら言った…。

ホームルームが終わると俺は一番先に教室を出た。
美代子から逃げる為だ。

（やうだ…！ あのメールは俺のトコに届いてないフリをすればいいんだ！）

確かに俺がメールアドを直接教えた訳じゃないから
届かないフリをすればあいつだって届いているかどうかわからない
はずだ…。

俺は急いで学校から出ようとした。

その時である。

“ ペペッ ”

メールの着信音が鳴る。

“ 一緒に帰るひつひつ言つたのに何で先に教室出たの～（^__^） ”

（つていうか、お前が勝手に決めた事だろ！？）

俺は思わず心の中で突つ込んだ。
とにかく無視だ無視。無視してしまえつ！

“ ペペッ ”

またメールが来た。

“ どーせ拓郎君はこのメールを無視するんだよね?
届いてないフリして。
でも、あたしもつき見たんだ。

屋上でけんじ君と話してる時ちゃんと届いていたよね? ”

と書かれていた。

俺は学校の近くにあるゲーセンに入った。

（ふん！どーせ人を脅かそうと嘘ついてるんだつ！
その手にのるか！ここで少し時間潰して帰るか…）

そう思つて俺はゲームをしようとした時

“ ピピッ ”

またメールが来た。

“ みづけたつ ”

「 」

(まあ、まさか?)

俺は後ろを振り返った…！

美代子が入口に立つていて、手を振っていた。

俺は美代子に気づいてないフリをしてそのまま裏口に向かって歩いた…。

(な・なんであいつはここにいる事わかつたんだ?)

それともずつと後をつけてて気づかなかつただけなのか!?)

その時いきなり後ろから腕を引っ張られた…！

俺は恐る恐るうしろを振り返える…！

「何で逃げるよ!」歩いてんの…?」

それは美代子ではなくけんじだった。

「おこつ、さつき入口に美代子いなかつたか?

」つち向いて手を振つてたんだ…!」

俺は動搖しながらけんじに問い合わせた

「ううん。俺も今入つて來たト」「だけど。
誰もいなかつたぜ。

…なにお前、美代子の幻覚みたんだ。
ホしてんじやないの!?

「…？ いや、だつて確かにあいつが立つてたんだ…」

俺は周りを見渡した。

しかし、美代子の姿はなかつた。

（幻覚だつたのかな？
でも、メールには見つけたつて書いてあるし…）

俺は不安ながらもけんじとゲームをし、店を出た。

「早いじゃまつまつわせりよ。」

「ほんとだよな。うん明日はまつまつよ

俺は自分に言い聞かせる様に言つた。

「じゃつー明日な

「ああ…」

そういうつて俺達は別れた。

またメールが来た…。

“ ピペッジ ”

“ゲームは楽しんだみたいね（^○^）
ゲームに夢中になつてた拓郎君の顔つてカワイイ”

俺は

（…やはり美代子は見てたんだ…）

なんて冷静に思いメールにはずっと無視してた…。

”

05 (後書き)

感想おまかしております。

翌朝、俺はかなり頭に来てしまった。

……だって俺が寝てる間に美代子からのメールが24件も入っていたから…

「ふう…」

俺は仕方なくメールをみた…。

“今日は遠くから拓郎君の夢中になつてゐる顔見られたから幸せ…今、何してんの？”

…そんな事から美代子のメールが始まってた。

“今日の夜御飯はグラタンとサラダだったよ。でもカロリー高いからサラダだけにしたかったんだけど、グラタンも少し食べちゃつた”

その後に…

“ふう…。やつぱり吐いたよ。

さつき電話に出なかつたね。わざとなのかな？”

“ねえ今ね、読みかけの小説があつて…これは近いうち映画化されるらし…”。

すつじいいい小説だから、ぜひ拓郎君と観に行きたいな～（^〇^）

”

美代子のメールは確かに普通の女の子みたいでかわいらしかった。

…でも、それも最初だけだ。

“ねえ、どうして返事くれないの？”

“わかつてんんだよ。

届いてるって…”

“いい加減にしてよつ！”

“お願い！返事してよ…

拓郎君とメールしたいだけなのよ！”

…と、まあ夜中の三時とか四時とかに入つてたんだけど

俺はマナーにしてるから全然気づかなかつた。

“おはよう。拓郎君。実はあんまり寝てないんだ。
その方がヤせるからね。

それから、もう少しで3キロもヤセちゃうんだ～。

”

“でもこれ以上ヤせて欲しいなんて言わないよね？”

俺はとにかくメールを読むのはやめて留守電を聞いてみる事にした。

『一件田です。

うええへつ…ハアハア…おえつ…ペー・シ…』

(またか…)

俺はそのまま次を聞いた。

『一件田です。…拓郎君聞いた?
美代子こんなにがんばってるんだよ?あなたの為なんだよ。
私は今のままでいいけどあなたが今の私をすきじやないから…。
ぜいたくだね!拓郎君!…ピッ…』

『三件田です。

…ん…ああ…ああ…い…拓郎君…
…は…あ…ああああ……は…あ…は…あ…は…あ…ピッ…』

(なんだ今は…?まさか…誰?)

そつおもつた途端、

俺は思わず携帯をバツグン放り投げてしまった…。

「な、なんだよーあいつ…こんなまでのまでも留守電に入れるなよー。」

俺は完璧にアタマに来たので今日のことを忘れてしまつた。

(つーか、言ひてるつもつなんだけどね)

俺は身支度をして家を出ようとドアを開けると

「おはよ。」

「と、声がした。

田の前に美代子が立っていた…。

「何でお前、俺の家知ってるの? 何でここに?」

「あ、ただ一緒に学校に行こうかなー? って思つたから…」

「お前、それは答えになつてないだろ? 何で俺ん家知つてんだよ! 俺、教えてないだろ? 携帯だつて何で知つてんだ! ?」

俺は美代子があまりにも気持ち悪くなつたのでムキになつていた。
だけど美代子は -

「好きな人の事ならなんでもわかるわよ。
もちろん色々な所から情報を収集して…」

「…美代子…はつきり言つとくけど、

俺はお前とは付き合つ氣なんてないよ…!
お前がいくり痩せようと付き合つ氣はない…」

俺ははつきり美代子の田を見て強く言つた。
美代子は顔をピクピクさせながら言い返す、

「……じゃあ拓郎君は嘘ついてたって事？ねえーそういう事ー？」

「嘘もなにも……俺は付き合つなんて一言も……お前が勝手に……」

「だつたら、もつと早く言こなさいよー

私にこゝまでわせといて振るなんて…ズルイー！」

美代子は田に涙を浮かべながらその場を走つていった。

でも、よかつた。

これでもう美代子とは何もない。
言いたい事もはつきり言つたしあの気持ち悪い行動ともオサラバだ

…。

俺はすがすがしい気持ちで学校に向かつた。

教室に入ると美代子が窓際の席でこいつをこりこんでた。

（ふんーー！うんだつて恐くねーよ…）

俺も美代子をこりむかのよつにして自分の席についた。

「おいつー聞いたよ…アレの事…」

けんじが俺に話しかけて來た。

「え？何を…？」

「お前、美代子とヤッたんだって？」

「はあー…？」

こ・わ・い！

「嘘だつてわかるけど他の嘘はどういつてるかはわからないぜ!…」

けんじが一矢一矢しながら叫ぶ。

俺は血の気が引いた。

だが、俺負けずにあいつに対抗した。

「みんな聞いてくれー!」

俺と美代子の噂を美代子から聞いていると嘘つなど、あれは嘘だからなー!作り話だ!」

「ひどいよ!拓郎君!」

いくら勢いで好きでもない私とヤッたからって、作り話なんて言いつらぎよー!」

美代子が反論して来た。

「私…わかってるんだよ。

拓郎君が私の事好きじゃないって…でも拓郎君、自分に好意を持つてる私を利用して誰でもいいからやりたかったんでしょー?」

(何言つてんだ?このオソナは…)

俺は、美代子が対抗してくると思わなかつたので
かなり呆然としてしまつた…。

「…でも、あたしは嬉しかつたの！」

拓郎君があたしを抱いてくれた事が…。

拓郎君にはただのはけ口かもしれないけど…

あたしには大切な出来事だつたのよ…うわあ～ん！」

美代子は皆の前で大泣きし出した。

「み・みんな！」いつは嘘泣きしてゐんだよつ！

俺は美代子にそんな事してないからなつ！」

「ホントの事よ！」

拓郎君はあたしの喘ぎ声だつて聞いてゐんだからあ…」

今朝の携帯に入つていた留守電の事だが
突然の大胆なセリフにみんな騒ぎ出した…。

「あれはお前が勝手に聞かせたんだるーが！」

「ほらあ…やつぱり聞いてるじゃないー自分で恥ずかしくない？」

「……！？」

更にみんなが騒ぎ出した。

確かに今の俺の発言は誤解を招く…。

今、俺が弁解しても騒ぎが大きくなるよつた気がして
俺は黙つたまま席についた。

そして

「でも、みんな聞いて！あたしはひつとも不幸じゃなことよ。
確かに見た目は悪いけど女として初めて幸せを感じて山口なの…。
それだけで今は幸せなの！
だから拓郎君を責めないでね…。」

俺は心底、美代子が恐いと思つてしまつた。

「…毎回言つてんだけど、あこつおかしこよ。
変な世界持つてるぜー。恐いよー」

「ああ、はつあつ言つたのに全然わかつてなかつた。」

「やつこいや、お前あいつの事昔から知つてんだろー？」

「うふ、まあね」

「あんな性格だつたん？」

「ああ…。そこまで仲がいいわけじゃなかつたからね」

「そつかあ…しかし、何であいつはイキナリ積極的になつたんだ？
今まで話すらあまりしなかつたんだろ？」

「…ああ。」

俺はけんじと学校の屋上で美代子について話しあっていた。たしかに最近の出来事が急展開し過ぎでワケがわからない。

「よおし、俺ちょっと美代子について調べてみるわ」

「と、けんじが突然言つた。

「ばか、やめとけ。あいつ頭おかしいから何すんかわからないよ。危険過ぎる…」

「はは…。大ゲサだな。大丈夫だよ。
俺そーゆうのすつごい大好き！」

「…ふう。お前に何かあつても知らないからな！」

俺達は笑いながら教室に戻つた。

教室に戻ると美代子が俺の席に座つてた。

「あ、おかえり拓郎君！待つてたの…」

「……なに？」

俺はそつけなく返事した。

「美代子ね、拓郎君に弁当作つて来たんだー。
ぜひ食べて欲しくつて…」

「……。」

「ん…？ なあ」「？」

「別」「」

「とりあえず昼休みになつたら食べてみてよ。」

そう言つて美代子は弁当箱を俺に渡した。

ふと周りを見渡すとクラスの皆が二タニタしていた。

「なんだかんだ言つて拓郎もまんざらでもないつて感じだなー」

「意外にお似合いかもねー。ひゅー×2」

（何も知らない）。「はあ…」

俺は席について弁当箱をカバンに入れた。

なんだか教室もだんだん居心地悪くなつて來た。

（大体俺は美代子ではなく愛子ちゃんが好きなんだ…）。

（このままじゃ愛子ちゃんに俺の気持ちを伝えられなくなる…。）

昼休み。

俺はけんじと屋上で美代子からもらつた弁当箱を開けて見た。

「おー、割とつまそーに出来てんじゃん。」

「…うん。でも氣味が悪いよ。中に何が入ってるか わかんないし

■ ■ ■

「はは…。なになに、玉子やワインナー、そぼろにチキンか…。これは焼肉かな？」

そういうて、けんじは焼肉らしきものを一口つまんだ……。

「あ・うめえや。キムチがきて食欲をソソる感じ。」

「じゃあ、お前が食ってくれ全部…」

「ワリィサビ、そういうの弁当は食えないね。君がきちんと食べなさい。」

「…はあ。食えるかなー？」

「まず食べて見ろってー! うまいぞー!」

俺は不安ながらも一回食べてみた。

「一ノ山」

「 ははは。 」
「 だら? あいつは見た目よりは女らしいかもな。 」

あんなにイヤイヤしていた俺だが、美代子の弁当を一気に全部たいらげてしまった。

「俺、貰つちやつた……」

「いいんだよ。それで…。一応お礼言えよ。いくら嫌いな美代子で

わわ。」

「ああ……」

教室に戻るなり俺は美代子のトロへ駆け寄った。

「美代子、弁当のまかっただぜ……ありがとうな……」

「……うわー全部食べててくれたの？ホントにおいしかった？」

「ああ……」

「うれしい……」

美代子は泣きながら言った。俺も一瞬だが、美代子がカワイイク見え
た……。

07 (後書き)

展開がまた違う方へ流れていきます。
感想おまちしております。

「あいつの家がわかつたぜ……。少し遠いけどな……」

いつもの学校の屋上でけんじが真顔で言つて來た。

「ふ~ん……。お前ホントに調べてるんだ……美代子の事……」

「確か、小学生から同じ学校だったんだり? じゃあ、学校での態度は何となくわかるだろ?」

「……いや、あんまり。暗い感じの印象くらいいだよ……」

「……実は今は両親とは別居中らしい。あいつには姉さんがいて一人暮らししてゐることよ」

「あ、そつなんだ……。何で両親とは別々に住んでんの……?」

「……たぶん、実家は更に学校から遠いからかな? だから少しでも近くに引越したんだろ……」

「……ふ~ん。」

美代子から弁当をもらつてから一週間が経つた。

その間俺はナンダカンダ言いながらも美代子からの弁当を残さず食

べている。

… ピッ…

「お・メールだつ」

“ ヤツホー 今、あたしからの弁当食べててくれるかな?
今日はハルマキ作つてみたよお～ (^ _ ^) ”

「ははは…。美代子らしいや。」

「おし、返事送つてやるか…」

… そう!俺はあれから美代子とメールもやるよつになつてしまつた
…。

特に理由はないが、

美代子に対する気持ちを変えたら別にイヤなものではないよつに思
えて來た。

確かに度を越えた彼女の愛情表現は恐い時もあるが、
それさえなればそんなにイヤな氣分ではない…。

“ 美代子、今日もおいしかつた。
ハルマキもかなりうまかつたよ”

“ ピッ”

送信ボタンを押した。

（俺つてズルイよな…
いくら弁当がうまいからって好きでもない美代子から
毎日作つてもらつなんて…）

俺は弁当箱を袋に入れ、そのまま寝転がつて空を見上げた。
俺は今、美代子に対して悪いと思つた。
最近までの俺ならそつは思わない。
美代子の事なんてどうでも良かったはずだ…。

…なのに、美代子に罪悪感を感じ、美代子の事を考えてばかりいる
…。

「よお、何考え事してんだ?」

ぼんやりしているに俺に気付いてか、
けんじが質問してきた。

「…うん…」

「愛子っちか…?」

「……。」

「美代子か…?」

「…最近、よくわかんないんだ。自分の気持ちが…」

「それって、美代子を好きって事なのか？」

「それはない。でも、前よりは悪く思つてない……」

けんじは意味がよくわからないのか首をかしげていた。

「……そ、うそう、美代子の実家は肉屋だったよ。だから弁当とか肉がよく使われてるだろ?」

「そういや、肉多いな。

でもあのキムチ味の焼肉はうまいよ。肉屋の娘だから肉料理は詳しつてワケか……。」

「だから、太つてんだよ。

肉の食べ過ぎで! ブクブクや! -

お前の二倍は食べてるぜー!」

「……。」

「あいつの姉ちゃんも美代子みたいに太つてんのかな?
……今度写真に撮つて来てやるうか?」

俺はけんじの言い方にムカついていた。
気付けば口を開いてる。

「もうやめろよ。そーいつの……。

お前にそ美代子とやつてる事一緒じゃねーか。
ストーカーみたいに後尾けたりして……」

「…なに急にかばつてんの？美代子はお前の事知りつくしてんだぜー。」
「いつもあいつの事知らなきや、手が打てないじやん。」

「だから、もういいよ。前よつは美代子の事警戒してないし…」

「…わからなーぜ。それがあいつの作戦かも…」

「…大丈夫だよ…」

「なんだよ。お前は愛子ちゃんが好きなんだろっ。」

「……あ、ああ。」

「俺達はまだ美代子の事知らな過ぎるー。つかつに近づかない方がいい！」

けんじはムキになつて言つた。

だが、それよりも俺が美代子に対しての気持ちの変化の方が俺は気になつた。

(…まつたくけんじにはマイツタ。

俺が被害者だつたのにあいつの方が入り込んでるなんてね…。
まあ、あいつは完璧主義なトコあるし…
たしか、親父さんが亡くなる前探偵やつてたとかどーとか言つてた
つけな。

だからなのかな？プライドとか関係してんのかなー？)

と、まあ考え事しながら歩いていた皿の前に座ったやんが立つてた。

「ちよっとこーし…？」

「ハ・ハ…」

「…、久しぶりね？ 口をすべの…」

「あ、そりこや、そりだね…」

俺は少し緊張してた。

愛子ちゃんも何だか戸惑いながら…。

「あ・美代子からの弁当残さず食べてるんだってね？ えらいねー」

「…ああ。うまいからね。っこ…」

「でしょー？」

実は私も森下君に作った弁当のあまりモノを美代子からもらってるの。

彼女が食べてつてしつこからだ。

それがかなりおこしゃべ、今は私からお願ひしておへりこよー…あはは…」

「あ、そりなんだーあはは…」

（何だか久しぶりに愛子ちゃんの笑顔を見た気がする…。
その笑顔に俺はホレたんだよな〜）

俺は嬉しかった。

ここ最近は美代子の事で彼女をよく困らせていたから。
そんな彼女と笑顔で話せたから…。

そして忘れかけていたドキドキ感が
また俺を動搖させていた。

08 (後書き)

この主人公って単純ですよね？

感想お待ちしております。

俺はホント……幸せだつたんだ。

このひと時が……。

こうして愛子ちゃんと並んで歩く事が夢だつたんだ。
でもその愛子ちゃんは俺と美代子の『恋』を願つている。

「美代子とはつき合つて行けそつぱぱつまだ無理?」

正直……胸が痛い。

「……彼女に対してもだそんな気になれない……。
でも、前よりは嫌いじゃないよ

「それは料理が上手かつたから? ポイントが上がつた?
あ～ん、男の人つてやっぱそういうの求めてんのねー。
私もがんばらなきやなー。」

「ははは……それもあるけど、

俺が美代子に対する気持ちを変えたつて事が大きいよ……。」

「なんでもまた……?」

「まあ簡単に言えば、見た目から入り過ぎたつて事かな?
中身を重視したら中々いないくらいイイ子だなーって……」

「うん。彼女はイイ子だよ。

私が保障する……もつ、遅いぞつー今頃美代子の良さに気づくなんて

……

「おひるひな子ちゃんは俺の肩を叩いた。
ホントおひるひな子が好きなんだ。」

「いあん、私行かなわや。またね」

遠ざかってこへん子ちゃん。

「……。」

（やつば、俺は愛子ちゃんが好きなんだな。）
話しておひるひな子。

見えなくなるまで愛子ちゃんを見つめていた。

放課後。

「拓郎くん……あたし……今日は用事あるから先帰るね……」

と、美代子が言った。

「あ・うん。明日な」

「また後でメールするから……じゃあね」

「ねいー。」

最近の放課後は美代子と話しながら帰る「トモシバシバアツ」。急に一人になると何だか物足りない気がする。

完璧に美代子のペースにハマってる自分に恐い気もするが…。

「森下くわへん…」

後ろから愛子ちゃんが走つて来た…。

「今日は美代子は一緒にじゃないの？」

「なんか用事があるつてさ。今帰るんだ？」

「うそ。じゃあ途中まで一緒に帰る。」

「やうだね」

やつともいつもして一緒に歩いていたのに
遠い昔に感じる。

それだけ待ち遠しかったのかな？

あどけない笑顔で愛子ちゃんは聞いてきた。

「ねえ、なんか聞きたい事ある？」

美代子の事とか…私の知ってる事なら教えてあげる…」

「…え！？ああ、じゃあ…」

なんで美代子は俺の事好きになつたんかなーって…」

「やだあ、そんな事本人にまだ聞いてなかつたのー？」

「一つでいいか、最近まで話すらしてなかつたし……。」

「……ううん。私、最近知つたんだよ。

美代子が森下君を好きだつてこと。

きっかけはね……昔、美代子がいじめられた時、
森下君が助けた事があつたらしいの……」

「え？ 僕が……？」

俺はすぐ驚いた……。

確かに美代子とは昔から同じ学校にいたが、
口を聞いた記憶も正直ないし……。

何故、

美代子は俺にその事を先に言わなかつたんだろう……？

「え……？ 僕、美代子を助けた記憶なんてないけど……」

「……うん。美代子も言つてた……

きつと拓郎君は忘れてるだろうつて……

小学生の頃の話だしね……」

「じゃあ、それ以来ずっと俺の事を……？」

「……うん。中学も高校も森下君を追つ掛けて来てるの……」

「……ううん。なんだ」

俺は言葉が出なかつた……。

「美代子が俺に対する気持ちが少し度を超えてる理由が何となくわかつたよ…。」

彼女からすれば長い時間俺に近づける口を待つてたんだね…」

「やつよ。私にでさえ自分の気持ちを隠してたんだもの。そーとーな想い入れよ…」

「でも、俺ずっと美代子と話した事ないと思つてたけど

過去にあつたんだな~」

「ふ~ん…ホントに森下君忘れてるんだ?

さつすが美代子ねえ。森下君の性格見抜いてる…。

私はそこまで森下君の性格見抜けないよ」

「…だつて愛子ちゃんとは会つてまだそんなに時間経つてないもん。仕方ないよ」

「……そうだね。」

「愛子ちゃんはやつこつて急に顔をつむいた…。

「愛子ちゃん…?」

「……」めん。「

「…?」

「前から聞いひつて思つてたんだけど…」

「う・うう…」

「……あ・あ・あのね…」

…ペペペ…

突然、俺の携帯が鳴り出した。

何かを言いかけた愛子ちゃん… それも真剣な顔つきで… だ。

俺はすぐにでも続きを聞いたかったんだけど… そうはいかない。

俺は電話を取り出し、通話ボタンを押した。

「あ・ごめん。……はい、もしもし…」

『拓郎か？俺、けんじだけど…』

「うん、どした？」

『今…美代子の家の前にいる…』

… その一言から事件は始まつたんだ。

09 (後書き)

次回から急展開！お楽しみに！

けんじからの電話だと気付き、
俺は愛子ちゃんから少し離れ、小さい声で

「お前なあ、そーいつ事やめりよーバレたら問題にならんやつー。」

『いいまで来て今更やめられるかよ。』

何が何でも俺は美代子を調べあげてやるぜ……』

「何でそこまでムキになるんだ？

親父さんの事関係してんのか？」

『ばっか。親父は関係ないだろ？

死んだ親父なんか今更どうでもいいぞ……
でも、気持ちはわかるな。俺は今この状況にハマッてるし……』

「遊び半分でやるなよ。犯罪だぜー。」

『ただ単純に美代子の事知りたいだけさ。』

あつー！美代子が出てきたつー！またあとで連絡する。じゃあな……』

「あつーおいつ……

… プツー・プツー …

けんじは一方的に電話を切つた。
俺は半ば呆れ、呟いた。

「一いつたぐ……」

「どうしたの……？」

愛子ちやんが心配そうに俺を見ていた。

「あ・いや……」

（けんじの事は愛子ちやんに言えないや。）

俺は携帯をポケットに入れると、話を誤魔化す様に問いかけた。

「やつにえは、わざ何か言いかけてなかつた？」

「え?……あ、うん……もうこいです……」

「何だよーー」氣になるじやん。いつみよ。ちゃんと聞くからね」

「…大した事じやないの。わかりきつた事なんだけどね…」

「…」

愛子ちやんは一睡飲むと俺を見た。

「じつじてあの日来なかつたの…？」

「え?あの日いつて?」

「私が少し遅れたのも悪かつたけど…」

「…二つの話?」

「俺は嫌な予感がした」

「だから私が森下に手紙を渡した田口……」

「!?」

「……来なかつたでしょ? あの田口……」

「俺は確認するよ! 田口! 」

「だつて、あの場所には美代子がいたんだよ。そこで俺は告白されたんだ……」

「……? ? ? ……」

「え? ジやあ……あの時の手紙は愛子ちゃんが俺宛に書いたの?」

「愛子ちゃんは急に後ろを回った。」

「……あ、ち・ち・違つち。今の流れで……」

「そつとつて俺から少し離れた。」

「俺は愛子ちゃんの肩を掴み、

「待つて! マジで正直に答えてくれよ。」

「あの田口俺を呼び出したのは美代子じゃなくて愛子ちゃんだったの?」

「…………。」

「 愛子ちやん……。」

愛子ちやんはゆうべりと俺を見て

「 ……「ん… あの手紙を書いたのは私で、森下君宛よ…」

やつ言つた。俺は一瞬真つ白になつたが、
理性を保ち、続けて質問をした。

「あの田… 俺を手紙で呼び出した事… 美代子は知つてた… ?」

「ううん。でも、私の気持ちを彼女に話した事あるわ…」

「えー…? 気持ち? その… 俺を呼び出した理由つてやつぱつ…」

「… そつよ。私、森下君の事… 好きなの」

「 …あ… どつも…」

俺は一気に顔が火照つて来た。

「 でも、森下君は今は美代子の事好きなんじょ?
私の出るスキなんてないよね…」

「 …あ、いや。スキがないじゃんかスキだらけで…」

俺はテヘヘといわんばかりに舌を出す。
だが、愛子ちやんは真顔で遠くを見ていた。

「…でも、私、美代子の事裏切れない。
だから森下君…美代子の傍にいてあげて…」

「ちよ、ちよと待つてよ。

美代子は愛子ちゃんの気持ち知つて俺に告白したんだよ…
それつて友情を裏切つてる事にならないか?」

「…私も美代子には何となくいな~つて軽く言つてただけだから、
ホンキにしてなかつたかも…」

「だからつて君に何も言わはず俺に告白したつてのか?」

俺は美代子のやり方にだんだん腹が立つて來た。
それでも愛子ちゃんは美代子をかばう。

「…私、知らなかつたのよ。

同じ日に告白しようとしてたなんて…

あの日、森下君私の事キライで來なかつたんだと思つてた

「でも、美代子は言つてた。愛子ちゃんに手紙を書かせて俺を呼ん
だつて…」

「え…!~」

しばらく間があつた…。

愛子ちゃんは訳がわからなくなつてる様子だった…。

「美代子は…私が手紙を渡したのを知つて森下君に告つた…。

たしか美代子は昔から森下君を好きだったはずだから…

私に取られるのが嫌で…

そういうえば、あの日…美代子の頼みで

プリントを先生に渡しに行って少し遅れたのよ…」

「ほら、その間に美代子は俺に告白したんだよ…

明らかに美代子のワナじやん…」

「……………」

「…そうね…でも、それだけ森下君が好きなね。

誰にも本当の気持ちが言えなくて…

親友の私にでさえズルイ手を使ってまで森下君と付き合いたかった
のよ……」

「…いや、あのね…そこまでして美代子をかばわなくてもいいんじ
やない?」

俺だって…あの日期待してたんだ…もしかしたら…」

「え?」

「…だから…俺も前からずっと恋になつてたんだ…愛子ちゃんの事
は…
でも、君は俺と美代子をくつつけようとするから俺の事好きじやな
いと……。」

「逆よ!好きだから応援してたのよ。

大好きな美代子と森下君だからつまづいてほしかったのー。」

「……………」

「……でも半分はツラかつた……。

「人がだんだん仲良くなってるの見て……」

「愛子ちゃん……」

俺は愛子ちゃんの肩を強く掴んだ。

愛子ちゃんは俺を見ると首を横に振った。

「……でも、もう遅いよ……。

美代子だつてその気だし……

クラスのみんなだつて二人は付き合つてるんだと……」

「……俺は……前から言つてるけど美代子とは付き合つひ氛ないよ

「そんな事言つても……毎日弁当食べてるし、放課後は一人でよくいるじゃない……どう見ても付き合つててる様にしか……！」

「君は知らないんだよ、美代子の本性を……

彼女は確かに外見は可愛くない……

でも、そういう人つて性格は美人だつて

よく言われてるけど美代子は見たまんまだよ。

彼女は欲しいモノはどんな手を使ってでも手に入れるタイプだよ。

今日それがはつきりわかったよ……」

「もつやめてよー。美代子の悪口は……」

愛子ちゃんは混乱のせいか急に泣き出した……。

「愛子ちゃん……」

俺は泣いてる愛子ちゃんを見てるしかなかつた……。

その時携帯が鳴つた。

画面にはけんじの名前が出てたのだが、電話には出なかつた……。
その時入つてた留守電のメッセージこそが事件の始まりだつた……。

10 (後書き)

次回はけんじ編です。

「もしもし……けんじだけど……

今、美代子の家の中にいる。ハア……ハア……

俺……とんでもないもの見てしまったんだ……ハア……あいつ……ヤバイよ……いいか！絶対美代子には近づくな！……またあとで連絡する……

……ピッ……

「ちくしょう……何で電話に出ないんだ？」

俺の名前はけんじ。

知つての通り拓郎の親友とでも言おうか？

実は今日は美代子の普段の生活を知る為に後を尾けた。

多分、美代子も拓郎に同じ事をしたであろう。

だからではないが同じ事をしてみた。

アパートの前で隠れながら立つていたら、美代子のヤツジが出て來た。

俺は拓郎と電話してたからすぐに切つたんだ。

そして俺はアパートの階段を上がり、

ちょうど美代子と姉さんの部屋のドアの前に立つて見た。
ドアのノブをひねつてみると鍵は掛かってなかつた。
中を覗くと誰もいなかつたんでこつそり入つてみた。
悪い事をしてるのはわかつてるが

俺の好奇心なのか冒険心なのかはわからないが
押さえ切れない何かがあつて行動した。

「…………。」

……今……それを後悔してる……。

拓郎の言つ様にヘタに関わらない方が良かつたかも…。

（はつ！鍵が開いてたって事はすぐに戻つて来るつて事だ…！
早くここの部屋から出よつ…！）

俺は急いで出よつとした…。

“ カンカンカン ”

（ヤバイッ！美代子の足音だ…ちくしょつ…ベランダからは降りられないし、隠れるしかないのか！？）

俺は急いでクローゼットに身を隠した…。

“ ガチャ ”

美代子がドアを開けて入つて來た。

俺は隙間から美代子の姿をはつきり確認すると息を殺す。

（…俺は見てしまつた…美代子の秘密を…
あれは…明らかにそうだ…絶対にそうだ…
早くここから出なれば…）

美代子は鼻歌を歌いながら台所にいた…。

ああ、多分 明日の弁当の材料でも買って來たんだろう…。
その姿は健気に見えるはずだろ？が眞実はそうじやない…！
彼女は狂つてゐる…！

イカれてるんだ…俺はクローゼットの中で震える身体を必死に押さえた。

そうすればそうするほど震えは震つて来て気が狂いそうだった。
そして、無意識に携帯を持っていた右手が何かに当たった！

“カタツ”

(ヤバイッ……)

美代子はすかさず二つを見た。

(……バレたか？……)

しかし、美代子はあまり気にせず台所に立っていた。

(……ふう……良かった)

「何してるの……？」

俺はハツとした。隙間から覗くと、田の前にいた美代子と田があつた！

その瞬間、ぱつとドアが開いた……！

「いらっしゃい……けんじくん……」

美代子はニッコリと微笑んでいて、右手には包丁を持っていた。

「ねえ……アンタさあ、ストーカーなの？」

美代子の顔は急に険しくなり、俺の顔に包丁を当たた。

「違ひ…ジョークなんだ…美代子を驚かせつと…」

「嘘つたら…」お調子者がつ…バレバレなのよ…」

「ははは…バレたか?わかった…警察にでも突き出す?」

「…ねえ、アンタも…拓郎君にあたしとおき合ひの事反対してるので
しょ?」

かなり迷惑なんだけど。」

「…わかった。俺を警察でも向でも突き出してくれよ…あなたの
気が済む様に…」

「…見たんでしょ?」

「ん?何を…!?」

「あの中を…」

そう言つて美代子が指した場所は
この小さなアパートには似つかわしくない巨大な冷蔵庫だった…。

そして

「アンタも入る?」

美代子がやせこわつて顔ついた…。

「な・なんだよ…アレは…誰なんだよ…」

「ああ…。誰と思つ?あなたも知つてゐる人だと思つけば…」

「は…。」

俺は美代子がしてきた事を全て話した…。

そして美代子の事で愛子ちゃんは泣いていた…。

「大丈夫?愛子ちゃん…」

「…「うん。」「めんね…何か…
つい感情的になつちゃつて…そんな事があつたんだ…」

愛子ちゃんはゆづくつとつと…

「がつかりした?親友がそんな事するなんて…」

「……手紙を渡した日ね…森下君が来るのをしばらく待つてたんだ…
1時間近く…そしたら美代子が来たの…
委員会か何かの居残りで…今思えば嘘だつたんだけど…」

『愛子…何してゐるの?』『んなと』

『あ…うん。人を待つてたんだけど…美代子…私フリーチャット…』

『ヤダ…皆口ずるつもりだったの?…どうして教えてくれなかつたのよ』

『…『めんね…』

『「うん。大丈夫?』

…私、美代子の声聞いたら何だかホッとしちゃって涙が溢れてきちゃつて泣いたのね。そしたら美代子も泣いてくれて…

「そんなの陋だよ。その直前に俺に告つてゐるんだよー?」

「うん、セーマーはね…でもそのあと…

『愛子…『めんね』

『なんで美代子が謝るのー?』

『「うん…何となく…『めんね』』

『チーン（鼻をかむ音）』

…つまり、少なくとも美代子は罪悪感があつたのよ…

「…いつ美代子から俺の事を聞いたの？」

「たしか…翌日、美代子は学校休んだでしょ？」

そのまた翌日に聞いた…もう、学校中の噂だつたけど…」

「待つてよー手紙の翌日にたしか、教室の前で会つた時
『あれが答えなの？』

つて美代子の事じやなかつたの？」

「違うわよ。私の手紙に対する答えの事聞いたのよ…

森下君が『そーだよ』つて言うからかなりショック受けたけど…」

「そつだつたんだ…美代子がホントに罪悪感があつたなら
何故愛子ちゃんに真実を話さないんだろう…」

「…そつね…」

そして、俺達二人は納得しないままそこで別れた…。

俺は学校に来るなり、けんじを探していた。

翌日

あれから留守電のメッセージを聞くも、一向にから電話してもつながらないし、

家に電話しても帰つて来てない…。

もしかしたら今日学校に来てるかも知れない。

そいつ思つて探してゐるのだが見当たらないのだ…。

「おはよーー森下君」

愛子ちゃんが笑顔で声を掛けってきた。

「あ・美代子も一緒に？」

「ううん。まだ見てないけど…どうかした？」

「けんじの奴が来てないんだ…家にも帰ってないらしい…」

「何があったの？」

「俺の携帯に入つてた留守電を聞いてくれ」

俺は愛子ちゃんにけんじの入れた留守電を聞かせた…。

「これって…美代子の家に行つた後何かあつたって事？」

「わからない…教室に行つてみよっ…」

教室には美代子はまだ来てなかつた…。
そしてホームルームが始まつた…。

「なんだーー美代子は休みなのかー？」

担任が皆に問い合わせる。

みんな興味ないのか無反応だった。

「先生には連絡なかつたぞ…めずらしぃな…
けんじの奴はゆうべから帰つてないと両親から電話あつたし…」

ガラガラ…

「遅刻してスイマセン…」

美代子が遅れて教室に入つて來た…。

「何だ遅刻か…？めずらしぃな…まあいい、席に着け…」

「は…」

席に着いたとした美代子と田が会つ…

「お早う。」

「…お…おひ」

いつもと変わらない美代子がそこにいた。

「なあ…美代子…」

「…なあに？」

「昨日…けんじと会つた…？」

「…え！？ なんで？」

「…あ・いや…」

「だつてあたし、けんじ君とあんまし話した事ないし…会つたとしても話が続かないわよ。何でそんな事聞くの…？」

「…いや…何でもない…気にしないでくれ」

美代子の態度はいたつて冷静だった…。

ホントに知らないのか、それとも演技なのか…。

授業が始まり時間は経っていた。

もちろん、俺は授業に集中できない。

けんじはどこへ行ったのだろう？

あの留守電の声は明らかにおかしかつたから美代子の家で何かあつたのは確かだ…。

突然、マナーモードにしていた俺の携帯がバイブしていた。先生にバレンタインのように携帯を取り出したら画面にけんじの名前が表示されていた…。

（けんじ！？）

電話ではなくメールだったのでメール表示ボタンを押した…。

“助けてくれ！今、美代子の部屋で身動きとれない状態だ。

かろうじて手が動けるからメールした。

とだけ送られてた。

…やはり、けんじは美代子の家にいた…！

俺は美代子にバレンタインにけんじに返信した。

“場所はどこなんだ？”

ふと美代子の方をみた。

彼女は何も気付かずノートをとつてた。
どうやらいちいちに気付いてないらしい。

振動がまた来了。

メールをみたら返事が入つてた…。

“場所は…”

そこには『ある場所』を書いてあつた。
たぶん、美代子の家だろう。

(そこならわかるはず…。ちくしょー今、授業中だぞー…どうされ
ば…)

俺は今すぐにでもけんじを助けたかったがどうする事も出来ない。

(ん？待てよ…)

俺はある考えを思いついた。

(授業中だつたら美代子は家に帰らない……)

俺は急いでけんじに返信した。

“今、助けに行く。もう少し待つてくれ”

送信ボタンを押すなり俺は席を立つた。

ガラララ…

「ん? どうした? 森下…」

「先生… 気分が悪いんです… 早退してもいいですか?」

「どうした? んー? 確かに顔色悪いなあ」

「お願いします。マジで身体がキツイんです。自分の体は自分がよく知っています…」

「…かなり顔色悪いから… そつだな帰つて休んだ方がいいな…」

「すいません…」

俺は急いでカバンに教科書を詰めた…。

「大丈夫? 拓郎君…」

「…うん。じゃあ… 行くね…」

昨日のけんじの留守電と睡眠不足のせいで
顔色がホントに悪かったのが幸いして教室を出る事が出来た。
俺はそそくさと教室を出て、けんじがくれたメールで美代子の家へ
向かつた…。

(いじだ…)

俺は美代子が住んでるアパートの前までやつて來た…。
階段を上がり部屋の前まで歩いた。

(けんじ…今たすけるぞ…)

まず、俺はドアノブをひねつた…。

…開かない…当然だよな。中にはお姉さんらしき人もいないようだ
…。

(…どうすれば?…)

ドアの横には窓があつた。

そこを開けようとしたら開いた。

(おいおい鍵かけるよ…)

だが人間が入れるほど大きな窓ではないので腕を入れ裏から鍵を…
しかし、届かない。

中を覗くと台所になつていて目の前に雑巾がハンガーでかけられた。

（これが…）

ハンガーを取り出し、それを棒の様に伸ばして裏から鍵を開けた。

“ガチャ”

俺は忍び足で部屋に入るとドアを閉めた。

“バタン”

(「これが美代子の部屋…？」)

俺の鼓動は高まつていく。

(カニシーピリにこるんだ…)

美代子の部屋や美代子のお姉さんの部屋を探したが、けんじの姿がない…。

(ナハだ…電話をしてみよハ…)

俺はけんじの携帯へ電話したが、出る気配がない。…もしかすると気絶でもしてるんじゃないかと不安になり、あせる。

(ん? 何か音がするぞ…)

耳を澄ますと確かに

“「」おおーー” って地面に少し響く重い音がした…。

(何の音だー? 」) ちからか?)

台所に行くと俺は「あよっ」とした…。

そこには大きな冷蔵庫が…。

「な・なんでこんなでかい冷蔵庫が…」

「あたしん家が肉屋してたからよ……」

後ろから声がした。

俺はゆつくりと振り返る。

美代子が立っていた。

「実家で古くなつた冷蔵庫を新しいのに換える時あたしがもつたの……」

見てみて……！」に普段使つてる冷蔵庫があるの……」

美代子はスタスターと小さい冷蔵庫の元へ歩いた。
そしてドアを開け「一ラを取り出した。

「拓郎君も飲む？」

「……な・なんでお前・学校にいるんじゃなかつたのか……？」

美代子は「一ラをねじしそうにグビグビ飲み始めた。

「ふはーーーやっぱ一ラは最高だわー！

「これを一気に飲む快感はやめられないたらありやしないー！」

「……聞いてるのか？」

「わかつてゐわよ。もつて一度けんじ君に電話をかけてみてよ。」

「はーー? なんで?」

「いいからー、维ヒツー！」

美代子はげつぶしながらじなつてた…。

「…わかつたよ」

“ピツ”

“フルルル…”

「えーー？」

「うふふふ…」

笑いながら美代子はけんじの携帯をポケットから取り出した…。

「あのメールはあたしが送ったの…うふ」

「……じゃあ…けんじは…あこつせび！」この？美代子…」

「あなたのうしろよ…うしろ…」

「え…ーー？」

俺は一瞬固まつた。

そしてゆつくりと振り返る。

(俺のうしろ？…いや、そんなはずはない…俺のうしろは冷蔵庫だ…)

そんなトコ入つたら……俺達人間は死んでしまう……（

「…………はつ……はあつ」

俺は少しづつ体の角度を変えていく。

そして同時に体が震え出して來てるのがわかる……。

「…………はあ……はあ……」

息だつて苦しい……頭の中まで脈の振動が伝わる。
俺はちょうど巨大な冷蔵庫と向き合つ形になつた。

「……へへ……何してんの？早く開けなさいよ……」

美代子が笑いをこらえながら怒鳴つてゐる……。

俺はそつとレバーを掴み、引っ張つた。

「うわあああああ～～～！」

俺はその場に腰を抜かした。

「けんじ……？」

冷蔵庫の中でいつすらと田を開けながら
座つてるとも立つてるとも言えない微妙な体勢で…
まるで彼だけが時間が止まつたかのよつて
彼は冷たく固まつていた。

「嘘つとくけど、あたしがけんじ君を殺したんじゃなにわよ。
彼は自分で勝手に死んだの…」

「…ウソだ！お前が殺つたんだろ…？」

俺は反射的に叫んでいた。

「違うわよ。だいたい勝手に人の家に上がつて
人の部屋あさつて勝手に死んで迷惑してるのは」
「…」

美代子は冷静に溜息混じりに言い返す。

「…そ・そんな事信じられない！」

「とにかく…状況を語るから聞いて…」

『ホラッ！俺を警察に突きだせよ…。

包丁なんかしまつてや。俺は乱暴なんかしないよ』

そう言つたかと思つとけんじ君あたしの包丁が恐かつたのか、
あたしから包丁をスキを見て奪おうとしたの…

「ちゅう… やめてよ！痛い…！痛い！」

『「うるせーー俺を殺す気だろーー？」』

けんじ君はあたしから包丁を奪い、
あたしを掴んでこの冷蔵庫に入れようとしたの…！
あたしは必死に抵抗したわ… だつて仮にも不法侵入した男よ！
何されるかわからない… 腕を思い切り振り払ったの…
そしたら… あたしはバランスを崩して、
その拍子にけんじ君は自分が冷蔵庫の中に入ったの…
あたしはそのまま倒れ氣を失つたの…。

… 気が付いた時には朝になつていて…
あたしはてつときりけんじ君は逃げたとばかり思つてたの…。
でも、おかしいの… 靴が片方落ちてたの… 冷蔵庫の前に…。
これつてまさか… 思つて冷蔵庫を開けたら… けんじ君がこの姿に
…。
きっと、彼が中に入つた振動でドアも閉まつたのね…
中からは開けられない旧式タイプの冷蔵庫だし…
冷蔵庫つて言つても中の温度は -24 だし…
あたしは氣失つて気づかなかつた…。だから死んだのよ。
事故なのよー あたしは不法侵入した男を正当防衛しただけなのよ…
！』

美代子は震えた声でそう言つた。

「…じ、じゃあなんで… すぐに警察に通報しなかつたんだ…
何故このままの状態に…」

美代子は俺を見た…。

「言えるワケないじゃない…だつてまだ…まだ復讐は終わつてない
んだもの…！」

やつとその時が来たのに…

「復讐…？」

美代子はゆつくり微笑んでいた…。

「…拓郎君…好きよ…」

そう言つて美代子は俺に近づいた…右手には何かを持っていた…

「お・おこ…一つかや ああああ…」

俺は体に強いシビレを感じて一気に記憶が無くなつた…。

「「めんね…これ、スタンガンなの…」

薄れて行く意識に聞こえた美代子の言葉だった…。

暗闇の中からゆりくりと明かりが差してくる…。

「……………」

「気がついた？拓郎君…今ね、御飯作ってるから待つて…」

俺はまだ痺れが残ってる身体を動かそうとしたが、思つようにも動かない。

「…………俺は…氣を失つてたのか…？」

「…………めんね。手荒な事して…」

でもじうしなきや女のあたしには押さえられる事無理だもの…」

「…………ん？…あれ！？」

よくみるとロープで手足を縛られ、鎖で繋がられていた。

「おこつ…一美代子！…これほどつう事だ！…」

大声で美代子に怒鳴りつけた…。

「決まつてるじゃない。逃げられない様にしたまでよ。当然の事でしょ？」

あなたをここまで呼ぶ為にどうしようかと考えたけど、けんじ君の携帯で簡単にワナにハマってくれたんだもの。

けんじ君には感謝しなきやね…」

「いじから」れを解けよつー美代子ー。」

「はあーー。出来たわよー 拓郎君の好きな焼肉よー。つら

美代子は御膳にたくさんの料理を乗せて持つて来た。

「おかわりはいくらでもあるからどんどん食べてよー。
もちろん、あたしが食べさせてあげるからねー」

「」れを解けよー。」

まるで俺の声が聞こえないかのようだ。美代子は箸を取る。

「はー、あーん…」

美代子は御飯と肉と一緒に俺の口へ運んで来た。

ムカつこてる俺は それを拒んだ…。

それでも美代子は無理矢理にそれを俺の口へねじ込んだ。

「うぐぐ…ぐう

「ぬあ、わやんと食べなきや…成長期なんだからね…」

続けて次の一口分箸を持って来る。

「こりなー…。」

「ダメよ…」

「食欲がない…」

俺がそう言つと美代子は箸を置き、素手で「は」と肉を取り俺の口へねじ込んだ…！

「うううう…ぐうう」

「おこし…おこしよね？」

美代子はやせし口調で問い合わせる。

「…」

「かわいい…拓郎くん…あやは…」

「…」

それからあつとこつ間に唇口となつた。

美代子は俺を「」に監禁してゐにも関わらず、平気な顔をして学校に行つていなかつた。

（今、何時だ？）

俺は部屋を見渡した…。

一応、鎖で繋がれ体中ロープで縛られてゐるといえ、

なんとか移動はできる状態なのでイモ虫みたいに動きながら時計を探した……。

（あつた……昼1-2時があ……丸一日は経ってるな……親は心配してんだろうなあ……はあ……）

……一応、俺なりに大声を出したり、わざと大きな音をたてたりして隣の人や近所の人達に聞こえる様にしたが何も反応がない……。

……つていうかこのアパートの隣で工事が始まつていて、俺の声なんてそこで揉み消されてるようだった。

カーン……カーン……

ガチャツ。

「ただいまあー……。あーもう！隣の工事がうるさいわよ！ふう……。あ・そうそう！学校でけんじ君に続いて拓郎君まで行方不明になつて大騒動よ……

これでバレるのも時間の問題かしら？」

「…………。」

「あ・もつ少し待つて……今から口のガムテープ取つてあげるからさ。」

そいつって美代子は俺の口にしてたガムテープをゆっくり剥がしたと思つなり“ぶちゅつ”とキスをした！

「

びっくりした俺は離れようとしたが体が言つ事をきくはずもなく為すがままだった…！

「ねえ… 今日何で早く学校終わったと思う？」

さつきも話したようにあなたとそこにいるけんじ君がいなくなつたから

緊急集会やら何たらで学校にマスコミが集まり始めたからなの…。もう大変なのよ… でも早く帰れて良かつた… あたしまで学校に来なくなつたらヤバイよね…？」

「…でも、いざれバレンゼ…。」

「さうね… そうかもね。時間の問題ね。ビッちが先かつて事よね…？」

「ビッち…？・って何が？」

俺がそう聞くと美代子は立ち上がり

「…ねえ… そろそろお風にしようか… そつしょ…。今つくるね…」

「…美代子… お前… 」 ひで姉さんと暮らしてんじゃないのか？

「よくわかるわね？ 今は地方に仕事で行つてるのでだからしづらへはないわよ。」

「…お前… 俺をどうするつもつよ…」

「…ビッち…？」

「……だから……」

トントントントントントントント

「俺を殺すつもりなのか……！？」

俺は大声で美代子に向かつて叫んだ。

……ジユウウウウ……

美代子は俺の大声など気にせず肉と野菜を炒めていた……。

「聞いてるのか！俺を殺すつもりなとかと聞いてるんだよ……！」

俺はまたありつたけの声量で叫んだ。

美代子は無表情で振り向くと

「そんな大声出したって誰も来ないわよ……。あ・御飯は大盛り？」

「どういう事だよ……？」

「……あのねー、このアパート数日後には取り壊されるのよ……。だからもう誰も住んでないの……」

「俺達だけ！？」

美代子は御飯やおかずを運んで来た。

「ん。たくさん食べてよー。時間もないんだし……。」

「時間つて……？」

「……ここが壊される前にあたし達死ぬの……」

「死ぬ？」

「そうよ。だつてこのまま生きててもしょうがないでしょ？あたし一人で死ぬのはイヤよー。」

「待てよーホンキなのかー？」

「……本気よ。前から決めてた事なの……。はい、あ～んして……」

「……こらない……」

「もういい加減にしてよー。あたしがどんだけ一生懸命これ作つたと思つてんのー。このままじゃ美代子が可哀相よ……！」

「死ぬつて聞いて食欲あるかよー！」

「いいえー絶対食べてもううわー。美代子の為にも……」

「美代子はお前だろー。」

「…………。」

「……な……何だよつー。」

「ふふ…あはははは…」

突然、美代子は笑い出すので

俺はあっけにとられていた…。

「あはははは…」

「…？…美代子…」

「『じめん…』じめんね…拓郎君…つひひ…あたし…美代子じゃないの…あははは…」

「…？…え？」

「…あたし…美代子の姉の…美佐子なの」

「えー…どういう事? だつて… どう見たつて… 美代子本人にしか…」

「だからあ、 双子だつて事よ!」

美代子とあたしは双生児なの… あははは…
そつくりでしょー? 顔も体形も身長も…
両親でさえ時々まちがえるくらいだもの… わかるはずないわ…」

俺は美代子… の顔をマジマジと見つめた。
美代子は満足そうに笑みを浮かべている。

「…ホントに美代子じゃないの…?」

「…違うわ。信じなくともいいけど…」

「…じゃあ納得行かないな。もし美代子じゃないなら、何故俺をこんな目に合わせんですか?」

美代子ならともかくお姉さんには関係ない事じゃないですか…。」

それを聞いた美代子は… いや、 美佐子はいきなり立ち上がった。

「関係ない! ? 大アリよ! あなたはあたし達二人を壊した人なのよ!…
あなたがいなければあたし達は苦しまずに済んだのに…!」

「俺が何したつて言うんだよつー美代子はどうにいるんだ! ?
ここにはいないのか?」

「…………こるわよ。今、連れて来る……」

そうじつて美佐子は奥の方へ消えていく。

（まさか…姉妹でツルんでたとは…）

俺はあまりのショックに呆然としていた。すると…

ズル…ズズズ…

（ん？何の音だ…？）

ズ…ズズズ…

「うう…くく…」

美佐子が何かを引っ張つて来た…。

「お・お…何を…」

その瞬間、俺は凍りついた…。

「よいしょ…ホラ…連れて来たわよ…」

「……まさか……」

美佐子が引っ張つて来たのは巨大なビニール袋…

「そうよ……」それが美代子よ…。最近死んだのよ…」

「うわあああーっ…」

俺はこの部屋に来て一番の叫び声を上げた。

「けんじ君にこれを見られたのよ。最初はヒヤッとしたけど死んだ
やつたしね…」

「……ああああ……」な・なんでお前は冷静なんだよ。仮にも妹だろ
つ…」

「……冷静？あははは…冷静ならなきゃアンタとくべく死んでるわよ
……！
いい？これだけは言つとくわ！美代子の死因は自殺よー！原因はアン
タ！」

「……………」

「美代子は最近、アンタに告白したよね？
だけどアンタは断つた…翌日、美代子学校に来なかつたの覚えてる？
その日…美代子は手首を切つて自殺したのよ…。」

「……………」

「アンタが断る理由はわかるわ……。だってあたし達見てのとおりアスだもの……それも双子そろつて！」

醜い肉の塊みたいにさ……あの子は思い込み激しいト「あるからアンタに切られたらもう何もなかつたのよ……！」

美佐子は泣きながらビールを開けていた……。

「……あたしは正直、人間不信だから恋なんて出来ない……だけど美代子は違つてた。

あの子はちゃんと拓郎君に恋してたし愛してた……。

美代子にとつてはあたしよりも拓郎君が全てだつたのよ……！」

ガサガサ……

そのビールから美代子の顔が出てきた……

そこの巨大な冷蔵庫に入れてあつたお陰か、まるで眠つているかのようだ。

「……あたしにとつては美代子が一番だつた……ずっと二人で生きて来た……理解し合つてた……

だから……アンタが許せなかつたの！

……でもこのままじゃ美代子が可哀相……少しでも拓郎君に近づけようと思つて……んふふ」

「……？……何が言いたい？」

「入れたのよ……あなたの弁当に毎日……

美代子の体の一部を…！

美代子はあなたの体の栄養となつてゐるの…あははませね…」

「う・うせだつ…」

頭が真つ白で無意識にそつ叫ぶ。

叫ぶ事によつてショックを和らげたかも知れない。

「おじしかつたー？あはははは…」

（俺が…美代子を…？）

今度はすゞい吐き氣に襲われた…。

「う…おええ」

「あはははははは…でも吐いちゃダメよ…せつかく作つたんだから…」

俺は押し寄せてくる嘔吐をじらうとバランスをとる。
だが、目の前にある『おかげ』が目に入るや否や嘔吐物が口から飛び出た。

「…おええ…お前は人間じゃないよ…じほつ…美佐子…狂つて
る…」

「…そうね。あなたに狂わされたもの…」

「……はあ……はあ……」

美佐子は美代子を大事そつに支え説明する。

「ほら見て……右半分無くなつてるでしょ？」これをね、キムチ漬けにして焼いたら最高だつたでしょ？愛子も食べたのよ……」

「……はあ……はあ……」

「……最初はアンタに復讐するつもりで近づいたわ……。でも何でだろ、美代子が乗り移つたみたいに今はアンタが好きなの……愛しいのよ……」

「……はあ……はあ……」

「好きよ。拓郎君」

美佐子は俺にキスをした。

「んぐぐぐ……」

「……あたし達にはもう時間がないの……だから……」

「だから……？」

「カラダも……愛し合いましょ……」

そういうつて美佐子は服を脱ぎ始めた……。

「ホンキで言つてるのか……？」

俺は次々と服を脱ぎ捨てる美佐子に問いかけた。

「ねえ、拓郎君あなたは女の子と経験あるのかな？」

「やめてくれ！俺は好きな子じゃなきゃカラダの関係は持ちたくないんだ……」

「ふふふ……それはりっぱな心がけね。そういうつ拓郎君つて好きよ。でもね、さつきも言つたようにあたし達には時間がないの……あたしは拓郎君とひとつになりたいの……」

そして、美佐子はスカートも脱ぎ下着姿になつた。

「…美佐子…やめろよ…」

俺は美佐子を見る事ができないので顔を背けた……。
だが、その先には美代子の遺体があつた。

俺はそここの美代子を見つめ、

「み…美佐子…」

「…ん？ なあに？」

「……その前に……美代子を元の場所に戻してくれないか？」

それじゃあ、集中できなによ。」

俺は美代子を指差しながら行つた。

「…あ・それもせつね…。待つてて今、戻すから。」

そうこつて美佐子は美代子をビールに包み奥へ引きずつて行く…。

俺は視界を360度見渡す、

（な、なんとか…逃げださなきや…つていってもこれじゃあ…なんか…なんか考えなきや…）

だが、どうする事もできず美佐子が戻つて来た…。

「さあ、始めてましょ。でも手足のロープは解かないからね。あたしがリードしてあげる。」

美佐子は俺の上に乗り胸を顔に押し当てた…。

「どう? 女の子のムネってやわらかこうじょう? 気持ちいい?」

「うが…が…ふが」

「あはは…やだ、くすぐりたいわよ」

その時ドアをノックする音が聞こえた…。

「美代子……私よ……愛子だけど……」

その声に俺は「あ！」と反応してしまつ。

（……愛子ちゃん……？）

俺の表情を見て、美佐子は面白くない。

「……うつーーー何の用なのよ。こんなイイ時に……でも、ムシシがうつか
……？」

「ねえーーーいるんでしょ？わかってるのよー。」

そつまつて何度もドアを叩く愛子ちゃん。

「……あ～もう、うるさいーーーいい！？あなたは隠れててーーー
……余計な事したり愛子の命はないわよー。」

「……わかった……」

美佐子は服を着て玄関へ向かった。

ガチャ

「どうしたの？ 愛子……」

息を切らしながら愛子ちゃんは言い放つ。

それとは対照的に美佐子は冷静そのものだった。

「……ねえ！ ホントは知ってるんでしょ？」

拓郎君やけんじ君の居場所……何をしたの？ あの一人には……

「…………。」

「あなたが何かを隠してるのはわかるの……」

「……何の話？ なに言つてゐるの？」

「いいから！ 中に入れて！」

愛子ちゃんは隙間から部屋に入ろうとするものの

巨大な身体には太刀打ちできない。

「……今散らかってるし、部屋の中じゃなく、どこか外で話しそうな
いいの……散らかってても……とにかく入れてよ……」

「……ふう。仕方ないわね。それじゃあ上がつて……」

愛子ちゃんはまさか田の前に俺やけんじがいるなんて思つてないんだうな……。

「とりあえず、上がって…」

「…「ん…」

「まつたく愛子もひどいわね…あたしが犯人だと決めつけるなんて…」

「…可能性があるのはあなたしかいもの…」

ガチャッ…

美佐子はドアの鍵ゆつくりと閉めた…。

部屋に入ると、愛子ちゃんは美佐子を見つめ、

「美代子…お願いだから正直に答えて…ホントは森下君の居場所知つてるんでしょう？」

「……まあ。」

「嘘よー…あなたは何かかくしてるつー…」

「なんでそんなに必死なワケ…?」

「…え?」

「愛子…あなたこそ正直に答えて…」

…好きなんでしょう、拓郎の事…」

「…………。」

「黙つてないで何とか言つてよ…」

「…………好きよ…」

「知つてたわよ…前からね…全く同じ人を好きになるなんて氣の
合つた友達も問題よね?」

「…………それは前にも言つたじゃな……井せか…あなた…」

「だからと云つてあたしは何も知らないわ!」

「あなた誰?」

その言葉に美佐子は目を見開く。

「…………あたしが誰に見えるの……?」

「違う…あなたは美代子じゃない…」

「どう見ても美代子でしょう?…何を根拠にそんな事言つてゐるの?」

「あなた…美代子まで隠してゐるの…?返してつー私の友達みんな返
してよ!」

愛子ちゃんは美佐子の肩をつかんで叫んでいた。

「返して…みんな返してよ…」

叫び散らす愛子ちゃんに美代子はびくん表情が変わって行った。

俺は心から愛子ちゃんに『逃げて…』と念じた。

あいつは危険だ…愛子ちゃんにはこの部屋からやれりやと出で行つて

欲しい。

だが、どうある事も出来ない。

俺は…田の前に立つの…。

「えいへ…えいなの？森下くんや美代子は…」

「…だからあたしが美代子つてば。」

すると、愛子ちゃんは家中動き回り何かを探し始めた…。

「拓郎くわ～ん…美代子…けんじくん…」

「はあ…しようがないわね…」

やつこつて美代子はポケットからスタンガンを取り出した。

美佐子はスタンガンを取り出す。
それに気付いた俺は…

「…んん！んん！んん！」

いくら俺が声を出しても愛子ちゃんは返付かない。

そして愛子ちゃんは…

「わやああーっ」

…ドサッ…

そのまま倒れ込んでしまった。

「きやははは…。見た？ねえ見た？愛子の倒れ方…。マンガみたい…。ぱあ～か…」

「…ん」

「気付いた？愛子ちゃん…」

「…………その頃せ……森下くんつーー？」

「…………やんばびりくりして起き上がれつとした…

「わやつ…」

「だ、だめだよ。急に動いたら…」

「何コレ?」

「…………やんも俺と回じよひに体中ロープに縛られていた。

「ねつせー」

美佐子が元気な顔をして現れた。

「…………」

「やだ……そんな顔しないで……あたし達友達でしょ?」

「あなたは誰なの?何故こんな事する必要があるの?」

愛子ちゃんは割りと冷静に美佐子と向き合っていた。

こんな状況だつてのに…意外に強い。

俺はついつい感心してしまった。

「…………ふう。やれやれ…。それよりさ、ハラ減つてない?
ほり、作ったのよ。焼肉ピラフ…。愛子も知ってるよね?
うひの肉は日本一おいしい肉って…」

「…………」

そつこつて一人分の皿をもつて来た。

「はい…拓郎くん」

美佐子は俺の前に来て、またキスをしてきた。

「んんっ」

舌もからめてくる…。

「うふふ…大胆よね。拓郎くん…」

「…ふはっ…お前が勝手にやつたんだろうーが…」

そんなやり取りを見て愛子ちゃんはポツリと言へ。

「…違う。美代子じゃない…美代子はそんな事できる人じゃないもの…」

愛子ちゃんの言葉がカソに触るのか、美佐子は愛子ちゃんの髪を掴み引っ張つた。

「…わやつ…」

「アソタさあ、そつきから美代子じゃないつむかのよー。
そつや、あたしは美代子じゃない…美代子の双子の姉の美佐子だ
よー。」

「…え？お姉さん…？」

... ?

「……じゃあ……美代子は？けんじくんは？」？

「...たわ。」

「ねえ！森下くんつ！あの「人はど」なの？」

- 8 -

ねえ……！」

俺は愛子ちゃんの言葉に返事する事が出来きなくて… ただ俯いていた。

言葉にするのが怖がったからだ

「ちょっとあたし…トイレ…あなた達は？」

バケツ用意してあるからいつでもオッケーよ。あははははは……」

スタスタ バタン。

美佐子はトイレへ行つたのを確認するなり、愛子ちゃんはしおを見た。

「…ねえ…森下くん…あの一人はどうなつたの…」

「…………。」

「ねえーちやんと話すよー。」

しつこく聞く連絡員は言いたくない言葉を放つた。

「……死んだよ。」

自分の口で言つと現実味が増してきて辛い。

「え……それって……殺されたって事?」

「……こや…美代子は自殺したらしく……」

「……うわ……」

「けんじのやつは事故死つてやつかな……」

「じやあ…お姉さんは直接的に何もしてないのね……?」

「…ああ…」

「…実はね、今私の服の中にマイクがあつてね。」

そのマイクは近くにいる刑事さん達につながつてゐるの……

「…えー?」

「だから余話はつ抜けなのよ。あ・来たつー。」

……スタスター…

「ふいースッキリ。」

「…………。」

「さ、アンタ達あたしが作つたピラフを食べてもらひわ」

カタツ、カチヤチヤ

「ほら、あ～んして拓郎君…」

「…………いらぬい…」

「まあた言つーなんで困らせる事ばかりいつのー」

美佐子の声が大きくなる。

……頭がズキズキする…

氣付けばさつもの言葉が聞こえてきた。

『死んだよ…』

自分で言つた言葉が自分の声で繰り返される。

『美代子とけんじくんは?』

『死んだよ』

ズキズキ

『美代子けんじ』

『死ん死だ死よ』

ズキズキズキ

『...と...くんは?』

『...死...』

『美代子とけんじくんは死んだよ』

ズキズキズキズキズキ

「いい加減にして! 子供じゃあるまいし! 食べなさい!」

その言葉に目が覚めたように美佐子を見た。
すると一気に恐ろしいほどの感情が押し寄せてきた。

「.....食べれない.....食べられるわけないだろ?

「.....!?

「.....うううううううう

「あなた泣いてるの？拓郎君…」

今頃になつて一人が死んだ哀しみがやつて來た。俺はただ泣く事しか出来ず、声を震わしていた。涙が次から次へと溢れ止まらなかつた。

「大丈夫？森下くん…」

もはや愛子ちゃんの言葉も耳に入らない。

「かわいそうに…でもね、泣いたつてムダよー…あー…食べなさいー…」

美佐子は俺の口に無理やり押し付ける。

「…」「…」

「もうやめて下せー…お姉さんー…」

「つぬせこわねつーあんたなんかにお姉さんつて言われる筋合ひないわ！」

「バシッ…」

「やめ…」

美佐子は愛子ちゃんに平手打ちを食らわした。

「いい…? あんたにも原因あるのよ…」

あんたがこるからこの男はあんたに惚れ、美代子はフランたの…

あなたが生きているから妹は死んだの！」

「…………」

「ねえ一人ともーお願いだから返してー美代子をあたしの元に返してよおおーー」

美佐子はその場で泣き崩れた。

「返してーーううーうー」

「…………。」

「…………。」

美代子はそのまま泣きながら歸っていた。

そして、少しの時間が過ぎた頃、

「...森下くん...」

「.....ん?」

「お姉さん... あのまま寝たみたいね...」

「ああ、やうだね。彼女も精神的にかなつマイツてるだらう...」

「...」のままだとお姉さんおかしくなつて私達は殺されてしまつわ...

愛子ちゃんは身体を動かしながらモゾモゾとしていた。
ロープを解こうとしているのか...?

「...警察が来るんだろ?」

「... そうね。でもその前に... ホラッ」

そうこうして愛子ちゃんは立ち上がつた。

「...あつー。」

「ナイフをスボンのポケットに入れてたの... おかげで切れたわ...」

「……よかつたー! まじ、早く逃げろよ」

「何言ひてるのよーーあなたも逃げるのよ」

「愛子ちゃんがやつと俺は首を横に振る。

「……いや……俺はほのまま残る……」

「……え? ばか言わないで!」

「のままだと死んじやうかもしれないのよーー」

「……ああ……」

「あなた正氣? そんな事、私が許さない」

「……美代子は……俺のせいで自殺したんだ……俺が彼女を殺したよう
なもんだ……」

「……でも……それは美代子が選んだ事よ……仕方ないじゃない……」

「けんじだつて……関係ないのに巻き込んだ! 美佐子だつて……彼女だ
つて追い込んだ!」

俺は思わず大声を上げた。

「しつ……お姉さんが起きあがつ……」

愛子ちゃんは美佐子を見た。

「…とにかく…俺は動かない…」

「ダメよーあなたもここから出るのー。」

「俺…この先…どうなるんだ?」ここから出て…あるのはみんなを殺した罪悪感だけ…そんなの耐えられない…」

「森下くん…」

「やつよーそれならここに残るべきよー。」

美佐子が起き上がりながら声を聞いた。

「…美佐子…」

「愛子…もう、アンタはいいわ。許してあげる…。でも拓郎君はダメ。あたしと一緒に死ぬの…」

「何言つてるの?死ぬなんて一番卑怯なやり方じゃない!」

「…卑怯か…そうだな…俺は最低だ…だから死んだ方がいいんだ…」

そう言つた瞬間、俺の頬に衝撃が走つた。

愛子ちゃんが平手打ちをしたのだ。

「森下くんつーつかりしてーねえーお願いだから…」

必死になつてゐる愛子ちゃんを見ても俺は無反応だった。

「あはははは…おかしいーおかしいねー」

「美佐子は愛子に指差しながら笑つてゐる。

「何がおかしいのよー森下くん?..ねえー」

「……。」

俺はただ黙つていた。

「あははは…。どいて、愛子…」

「ねえー!..森下くんつ」

「じゃなきこつて言つてみでしょー!..」

バシッ!

愛子ひやんが倒れこむ。

「へへー..」

「……へふふ…見苦しいわ愛子…」

美佐子は俺にしがみついて抱きついた。

「これで拓郎くんはあたしのもの…あなたから初めて奪つたわ
あつと美代子も満足してゐるはず…」

美代子ちゃんは身体を起しながら美佐子を睨んだ。

「…あなた…カン違にしてるわ…そんな事して美代子が喜ぶと思つてゐの…?」

「喜んでるわよ…美代子の事いちばん知つてゐのせいのあたしなのよ…」

美代子はあなたなんか嫌いなんだから…！」

「…あなた…ホントは嫉妬してゐんでしょう？」

「…なにが？」

「美代子を私や拓郎くんに取られて…」

「…」

その言葉に美佐子の顔は歪んだ。

「だつてそういうじゃない？…美代子はお姉さんを置いて死んじゃつたもの…」

独りで勝手に死んじゃつたから…」

「違うわつ…あたしは美代子の為を思つて…」

「…」

「警察だー。」ドアを開けなさいー。」

ドアのむこうで声がした。

「やつと来た…」

「…戀子…アンタが呼んだの?」

「やつよ…森下くん…これで助かるわー私達助かるのよ…」

「……。」

戀子ちゃんは俺の肩を掴んだ。

でも俺は遠くを見ているだけだ。

「やつわと開けないと、」ドアをぶち抜く…。

ドーン…

「はーーー今開けまや…あやあああーーー」

ドナッ…

戀子ちゃんは美佐子のスタンガンによつて倒れた…。

「まつたく邪魔なオンナだわね…」

美佐子はスタスタと台所へ向かつた…。

「…まあ…まあ…シビレ…動けない…」

美佐子ちゃんが必死でドアに向かつて動いてる姿を俺は見つめていた

。

そして美佐子はビールを引っ張つて来た。

そう美代子を…

18 (後書き)

いよいよラストスパート！
あと一回で最終話！
感想くださいな

ズルズルと美代子を引きずつて来た美佐子。

「…うそ…美代子?」

愛子ちゃんはゆっくつとホールに近づいた。

「…美代子はね、アンタと拓郎くんのせいで死んじゃったの…」

「…美代子…美代子おおおーつ…」

愛子ちゃんは美代子に抱きついて泣いていた。

そして美佐子はけんじも運んで来た…。

「…けんじくんまで…」

「…や、死のつか」

そのまま奥に消える美佐子。

「ねえ…森下くん…美代子の半分がないけど…」

「…俺達…毎日美佐子から貰つた弁当食つてただろ?…
アレに毎日少しずつ入れてたんだつて…」

「…え!…それつて…」

「 もう…毎日食べてんだ…美代子を…」

「 …「ひ…ひ…」」

愛子ちゃんはショックのあまり呆然としていた。
その背後から美佐子は奥から持つて来たガソリンを
美代子とけんじにかけた…。

「…美佐子…何やつてるの?」

「見ればわかるでしょ?「」を燃やして
みんな一緒に死ぬのよ…」

「やめて…お願いだから…刑事をあん…早く来てえー…」

「 もう簡単には開かないわ…ウスノロ刑事じゃない…」

「…まあ…まあ…森下くんつ!ホントに死んじやつよー。」

俺は聞く耳をもつていなかつたので、愛子ちゃんを無視していた。
美佐子は部屋の周りにガソリンをまき始めた…。
ガソリンの臭いが鼻につく…。

「森下くん!」

愛子ちゃんの力強い声に俺は愛子ちゃんを見つめた。
そして俺から出た言葉は、

「 …愛子ちゃん…早く逃げて…」

その言葉に愛子ちゃんは凄く哀しい表情をしていた。

「やつよ愛子…。がんばって玄関まで行きなさい。もう火をつける
わ…」

美佐子はライターを取り出し火をつけた。

「……わかった。」

愛子ちゃんは顔を下に向けると

「私も一緒に死ぬ…」

身体を震わせながら呟いた。

「…」

「森下くんが死ぬなら私も…」

「あらら。あんたまで？ホント邪魔オソナね」

「…」

「開けなさい…！」

様子がおかしい事に気がついたのか、

刑事さん達は必死にドアに体当たりしていた…。

「愛子ちゃん…ダメだよ…君は生きて…」

「勝手な事言わないで…あなたにそんな事言われたくないわ！」

「…美代子…いま行くからね…」

美佐子は田を閉じて祈るよ^{ヒリヒリ}うにライターを美代子に投げた。

ボツ…！

火は一気に線をなぞるように美代子を包み込んだ。

「……！」

「……！」

隣にいるけんじにも火が廻ってきた…。

ガソリンのお陰で炎は一気に勢力を増し部屋の半分近くまで燃え上がっていた。

俺は勢いよく部屋が燃えて行く光景に恐怖感を感じだしていた。

死ぬことを望んでるのに
体が本能的に危険信号を発してるのでどうか…？

「…」

愛子ちゃんが苦しそうに咳込んでいた。

美佐子は燃えてる美代子をうつとりと眺めている。

部屋の温度は上がり火はもう田の前だ…。

「…はつ…はつ…」

心臓の音が頭の中で響いてる…。

喉もカラカラだ。

そして、ぐるぐるとある言葉が廻り始めていた…。

それは…さつきと全く正反対の
『死にたくない』…だった。
自分でも正直…驚いた。

バチバチ…

すごい異臭が鼻につく…。

この臭いが人間の焼ける臭いだと気付いた時
俺は体を動かし、ロープを解こうとしてた。

「…森下くん？」

「…いやだー死にたくないー」んな所で死にたくないつー！」

必死で俺は暴れた。だが、ロープも鎖もビクともしなかった。

バチバチ…

煙が部屋を包み、呼吸がままならない…。

「これ…」

愛子ちゃんはナイフを投げた…。

ボトッ。

…だが、鎖に繋がれてる俺にはあと一歩届かない…。

「「ホッ…」ホッ…」

愛子ちゃんはシビレで動けない上に強で苦しかった…。

「はあー……はあー……」

煙で美佐子の姿も見えなくなっていた。

それでも俺は必死に動いていた……！

「……ちくしょーーー！ なんだ……！」ほつ 何やつてんだ俺はあー！」

もくもく煙は広がり、つこには愛子ちゃんの声も聞こえなくなっていた……。

「愛子ちゃん！ おーい！ 大丈夫かーーー。」ほつ ほつ

「…………。」

「はあー……はあー……」

煙は更に広がり俺までもが呼吸困難におちた。

「はつ……せえ……」

(俺はなんてバカだ…… 美代子もけんじも美佐子も……そして愛子ちゃんまでも巻き添えにするなんて……俺と知り合つた為にみんな幸せになれないなんて……どうかしてる……)

うつすううとしてる意識の中で声が聞こえる。

「おいつ…大丈夫か…？今、ロープと鎖を…」

「は…は…」

やつて来た男は俺の鎖とロープをことも簡単に解いた。

「ホラッ…もう動けるだろ…」

「…は…」

「俺の肩につかまれ…」

「…うん…」

俺は肩につかまりドアに向かって歩き出した…。

だが、この男の声…聞き覚えのある声だ。
すく身近で聞いたことある…。

ふと、目に入る倒れてる愛子ちゃんの姿。

俺は夢中で駆け寄っていた。

「…愛子ちゃん…」

愛子ちゃんを夢中で抱き上げるとドアに向かって歩き出す。

「いかないでええ…」

突然、煙の中から美佐子が出てきた…。

「あたしを置いてかないでよおお…」

美佐子は俺にしがみついた。

よく見ると美佐子の背中は燃えていた…。

「あつー・あつこよー・いやあああつー・」

「離せつー・俺はどうしても愛子ちゃんを助けたいんだつー・」

「いやよー・離せないー・」アンタも道連れにしてやるんだからあー・

「離せよつー・」

「オオオーッ！

火が風のように揺れている。
そして俺達は包まれていた…。

「いやあああー・いやよー…え？誰つー…？」

「美佐子ー・離せよー・」

だが、美佐子は俺の声が聞こえてないのか、俺の足から手を離さなかつた…。

燃え上がる炎は美佐子の背中から腕に広がっていく。

美佐子を包む衣類の焦げ臭い臭いと身体を包む皮膚の焼け爛れる臭いが混じり
息が出来ない状況になつていった。

それよりもしがみついている美佐子から
自分に火が移つて来ないか不安で必死に払いのけようとしていたが、
上手くいかない。

「あやあああーあついーあついよおー

「離せつー離せよー離すんだつー

「いたい！引つ張らないでええー！助けて！拓郎くうん！
誰かが…誰かがいるのー煙の中に…！」

美佐子は叫びながら俺の足から手を離した…。

「やめて！あたしだけ死ぬのはいやあああああああ…！」

すると、何故か美佐子はズルズルと火の中へ消えて行つた…。

まるで何かに引っ張られるよう…。

19 (後書き)

次回いよいよ最終回!
どんなラストを迎えるのかお楽しみに!!

「はあ……はつ……」

俺はとにかくドアの方へ歩いた。

何故かしらないが美佐子は炎の中に引きずり込まれた。

今が逃げるチャンスだ……！

拓郎くん

「……え……？」

「……ごめんね……。」

俺は声の下後ろを振り返る。

だが誰もいない。

火と煙の中で聞こえた俺の幻聴……

……まちがいなく美代子の声だった。

「はつ…はつ…はつ…ダメだ…」

「はつ…はつ…はつ…」

「はつ…はつ…ダメだ…」

「はあ…もうダメだ」

「はつ…はつ…ダメだ…」

もう少しでアドアという所で、俺は倒れた…。

煙と熱とのせいでもとんど意識がなくなりかけていた。
死んだよつて寝ていてる。

「はつ…はつ…はつ…ダメだ…」

ブオオオオオオオ - ツ

その時…

「おひつ…大丈夫か…おーーー…」

ドアをやぶつてはいつて来たのは刑事さん達だった…。

「はあ…はあ…は…」

「おこひー…意識はあるか…？」

「…はあ…はあ…」

「…はあ…はあ…が…」

「…はあ…はあ…はあ…」

「 」 うちにには焼死体があります……」

「 とにかく彼らを運ぶんだつ……」

「 はいっ……」

「 」

俺と愛子ちゃんは無事に救出された……。

数日後。

俺と愛子ちゃんはある病院に入院していた。
軽い火傷で済んだが、大事をとつてしばらく居る事になった。

「 ……外はいい天気ね。あの時がまるで嘘みたい……」

「 うん…… そうだね……」

俺と愛子ちゃんは外に散歩に出ていて、先日の火事の時に
美代子に助けられたこと話した。

「信じられない……。美代子に助けてもらつたなんて……」

「……ああ……俺もだよ。けどホントなんだ……。
あんな狭い家なのに俺達に火は来なかつた……
俺が必死にドアだと思って歩いて歩いてたトコはあの巨大な冷蔵庫だった
んだつて！」

冷氣のおかげで火が防げたんだつてさ。
しかも俺のロープ解いたの刑事さんと思つてたけど
誰もそんな事していないつて言つから……もしかすると
あれはけんじだつたかも知れない……」

「……助けられたのね……わたし達……。」

「ああ……感謝しないとね……」

「愛子ちゃんは一步先に歩くといつちへ振り向いた。

「でも、わたし達助かつて良かつたの？」

「……良かつたんじやない？一応、俺達ふたりが結ばれたつて事はハ
ッピー ENDだろ？」

「……うん……」

「……愛子ちゃん……君が生きると喜つたんだよ……けんじと美代子に助
けてもらつたんだからさ……」

「… そうだね…」

俺は力強く愛子ちゃんを抱きしめた。

「… 愛子ちゃん… ずっと好きだった…」

「… わたしも…」

そういうて俺達はキスをした…。

今までにないような解放感につよいの愛のあるキスを…

「… 拓郎くん… これプレゼント…」

「お? な? 突然…」

「ホラ今日で付合つて一ヶ月じゃない? だから…」

「マジで? 俺は用意してないよ…」「めんね。中身はな?」

「ふふ… 開けてみて。」

俺は愛子ちゃんからもらった箱を開けた。

「…………お。」れかあーなるほどね。」

「ふふ……なるべく生きてる時と同じ姿の方がいいかな?」

「だから『盗焼』なんだね?」

「うそ……つましつな……『ねずみ』でしょ?」

「わざわざ、味付けは『キムチ』だよね?」

「わざわざ、ねえー今食べてみてー。」

「……じゃあ一緒に食べよ……」

「……うん。」

俺と愛子ちゃんの『ねずみ』をかくつと口にさす。

「うそ……うそ。」れも美佐子ちゃんのお陰よね。こんなおこしこモ

「うそ……うそ。」れも美佐子ちゃんのお陰よね。こんなおこしこモ

ノを教えてくれたんだから……」

「……やうだな。あんなに……『人間』がうまいなんて知らなかつたし……でも……これじゃあ物足りないよ……」

「……やうね。ホントに食べたいモノはアレだもんね……」

やつこつて寝子ちゃんは田の前にある公園を指差した。

「……ああ。やうだな」

「……やうとおこじこせぢよ……」

すると、立つてこる場所にボールが転がつて來た。

「…………。」

奥から小学5、6年の男の子が走ってきた。

俺と愛子ちゃんは顔を見合せ、ゆつくつと睡を飲み込んだ。

「……もつ限界よ……拓郎くん……3日も寝てないの……あなたならわかるよね?」

「……ああ。でも……」れはいけない事だよ……やつてはいけない……」

「すいませーん。ボール」の辺で見ませんでしたか……？」

男の子は息を切らしながら声を掛けて來た。

「……見たよ。……向いにありますよ。一緒に探してあげる……」

「ありがとうございます。」

男の子は「ココ」と笑つてボールを探し出した。

「……いけない……いけない事なんだ……」

俺はそう言ひながら男の子の頭くりくの大きさの石を持ち上げ、男の子の頭に勢いよく振り下ろした。

ゴンッ

「……いけない事なんだ……いけない……」

俺がそつぱつと歎息を吐くのは一ヶ「ココと笑い、

「おこしゃれ……。」

…と一言述べた。

END

20 (後書き)

王道なパターンで終わってしまいました（笑）
ぜひ、感想をくださいな
ここまでよんと下さつてありがとうございました。
また近い内にお会いしましょう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5688a/>

blue spring

2010年10月28日03時34分発行